

3) 北海道大学大学院水産科学研究院や道立函館水産試験場と協力して、本道の主要なホタテガイ養殖の場である噴火湾のモニタリング観測を行うことである。

小樽港防波堤での定点観測は平成9年1月の開始以来10年目に入り、平成14年度からは、観測終了後直ちに地元の小樽市漁業協同組合に通報することで即時性が高く、生産現場に密着した情報とする活動を行っている。平成17年度からは、さらに(株)小樽水族館公社と連携した水温通報に取り組み、通報データをより有益なものとしている。観測データは道内他地点のデータとともに(社)北海道栽培漁業振興公社が発行する「養殖漁場海況速報」(月3回発行)および「養殖漁場海況観測取りまとめ」(年1回発行)として全道の海洋・水産関係機関に配布されている。また、当所を含めた全国の沿岸水温データを収集整理した資料集「日本全国沿岸水温の記録」を平成15年度の第8号まで刊行し、バックナンバーを当所のホームページで公開している。どちらも水産資源、地球環境、沿岸海洋などの分野の貴重な研究資料、海釣りなどのレジャーに関する情報源として高く評価された。この資料集の印刷刊行は平成15年度で終了し、平成16年度からはJODCがデータの収集と保管・管理、同センターのホームページを通じての公開を実施しており、データの収録地点も増えて利用者にとっては印刷刊行物よりもさらに便利なものとなった。

フェリーを利用したモニタリング観測は、そのデータが海上保安庁海洋情報部発行の「海洋速報」に利用されて即時的効果を発揮し、またJODCのデータベースとして保管されて道南沖太平洋、日本海東部に関する貴重な観測データとなっている。

### 3. 1 4 沿岸海域における地質環境基礎調査

(担当)：菅 和哉・仁科健二・内田康人・村山泰司・嵯峨山 積

本調査の目的は、沿岸の陸域および海域の地形・地質・底質を調査し、1/20万の「北海道沿岸の地質・底質図」および報告書を作成し、沿岸域の利用・開発・保全に寄与することである。調査範囲が広範に及ぶため、既存の地質資料等についても同図にまとめ、海域から陸域の連続した地質・底質を把握できるようにした。

本調査は本道を5沿岸域に区分して実施しており、これまでに日高沿岸から噴火湾にかけての海域(太平洋西海域)、津軽海峡から日本海南部にかけての海域(西南北海道海域)、日本海北部から宗谷岬にかけての海域(日本海北部海域)、オホーツク海から根室海峡にかけての海域(オホーツク・根室海峡海域)の各図面等の作成を行った。平成18～20年度は太平洋東海域(納沙布岬～襟裳岬)を調査対象としている。

平成18年度においては、主に海岸の地形や堆積物、侵食状況に関する調査を実施した。東部の根室半島から釧路市までは、岩石海岸が多く存在し、浜中湾や厚岸湾などの内湾には砂浜海岸も見られる。釧路市からその南西に位置する広尾町にかけてはほぼ直線状の海岸線が続き、砂浜海岸が多くを占めている。この砂浜海岸においては、海食崖が形成され波浪による侵食が進む海岸があった。広尾からその南方の襟裳岬にかけては再び岩石海岸が多くなり、険しい崖地形が見られる。

前述の侵食が進む砂浜海岸においては、海食崖の後退量、および砂浜断面の変化を知る目的で光波測距儀による測量を行った。次年次以降も同じところで測量を行い、海岸の侵食状況を調べる予定である。

### 3. 1 5 北海道沿岸海域における海洋特性に関する研究

(担当)：檜垣直幸・大澤賢人・木戸和男

北海道は、太平洋・日本海・オホーツク海という、性質の異なった海に囲まれている。それぞれの海域の特性を把握することは、環境保全、海洋の利用・開発、また、水産業の発展にとって重要である。